
エンジェルティアの最強執事

聖幻童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェルティアの最強執事

【Nコード】

N2623Y

【作者名】

聖幻童子

【あらすじ】

不良の俺、竜堂政宗^{りゅうどうせいそう}は高校を中退したその日に車にはねられ変なジジイに異世界へ転生させられる。そこでの俺は、その国の王女であるツンデレ美少女の執事になっていた……って、ちょっと待て！ 普通異世界転生って、勇者になって剣とか魔法で魔王倒すんじゃないの！？ ところが、ゆるふわ不思議お菓子系ロリロリ侍女やアマゾネスみたいなドS筋肉女剣士、フェロモンむんむんの美熟女王妃様や眼鏡ボクっ娘公爵令嬢やらが現れて俺はモテモテハーレム状態に。いや、ちょっとこれ、ヤバくねえ？ ww 喧嘩上等最強執

事ここに見参！ 世の中舐めきってますが、何か？ w （※かなりきわどいエロシーンが出てくる恐れがあります。苦手な方はご注意ください。また、ゆるゆる不定期更新ですが話もゆるゆる日常系で進みます。それでも必ず完結させますので、よければお付き合ってください）

第1話 ハゲジジイ

「おらあ！ こんな学校、こっちから辞めてやらあ！」

俺は折れたモップの柄を振り下ろし、窓ガラスを次々と割っている。遠巻きに眺める女子の悲鳴が、俺の逆立った感情を余計に刺激する。

「こらっ、竜堂！ やめんか！」

柔道部顧問の体育教師が、俺を背後から羽交い締めにする。

「放せよ、タコ！ ぶっとばしてやる！」

こうして俺は一年半の高校生活に終止符を打った。

世の中ウゼえことばっかだ。クソ親は俺のことをクソ溜めの汚物みてえな目で見るし、クソ教師どもは学校の体裁ばかり気にしやがる。

周りのヤツらは飼い慣らされた豚みてえに大人しく、俺には何もかもが色褪せて見えた。

大学教授をしている親父は何かにつけて俺と兄貴を比較した。

兄貴は常に成績優秀で優等生。一流大学にトップで入ってエリート街道まっしぐら。

母親の口癖は「あなたもお兄ちゃんみたいだったらねえ」だ。

「けっ！」

道端に唾を吐き、ポケットの中のタバコを取り出す。くそっ、空だし。

俺は不正入手したタスポでタバコを自販機で買おうとしたが、財布に二百円しか入っていないことに気づく。

「くっそっ！」

蹴った空き缶が歩道を転がっていく。夕暮れ時の町に空き缶の高い音が響き、塾に行くらしい男子中学生が怯えた表情で立ち止まっている。

「なんだよ、うらあ！」

金がねえならカツアゲでもしようかと、その中学生へ近づいていく。

「ひっ！」

踵を返して走り出すその中学生を追って、俺も走り出す。

くっそ、速えし！

日頃ニコチン漬けになってるだけに、すぐに息が上がってしまう。それでも中坊の頃は陸上部に勧誘されたぐらいなだけだな。

逃げる中学生を追って角を曲がると、いきなり目の前に夕暮れの赤い空が広がる。

車にはねられたのだと気づいた時、俺の頭には今までのくそったれな人生がまさに走馬燈のように流れてきた。

ああ、つまんねえ人生だったなあ。

今度生まれ変わったら、もう少しましな人生を送りてえもんだ。

……って、あれ？

いつまでも夕焼けの赤い空が広がっている。まるで時間が止まったように景色が固定されている。俺はいつの間にか黄昏の空の真っ只中に浮かんでいた。

死んで魂だけになっちゃったのかな？ まあそれもいいか。痛い思いするよりいいし。

妙に達観した気持ちになっていると、目の前に白い光が現れた。それは次第に強くなっていき、中からハゲたジジイが出てきた。

「ふおっふおっふお、見事にはね飛ばされおったのう」

「なんだジジイ」

そのジジイは真っ白いシーツのような布地を着ていた。そうまさにシーツの真ん中に穴を開けて、そこに首を突っ込んだような感じだ。服つつーより、布だな。

頭には毛は一本も生えてなく、眉毛と口ひげも真っ白だ。

右手に持った木の杖の上部は歪に膨らんでいて、仙人か魔法使い

といった感じだ。

「これ！」

右手に持った杖で頭を叩かれる。

「痛えっ！　って何で痛えんだ？」

「年長者は敬え、このバカモンが」

「おいハゲ、質問に答えろ。ここはなんだ？　俺は死んだんじゃないのか？」

「ハゲたくてハゲたわけじゃないわい！　まったくこれだから地球の若者は好かん」

「地球？」

そう思った時、このジジイが普通と違うことに気づいた。全身が淡い光に包まれ、瞳が澄んだ水色をしている。明らかに日本人じゃねえ！

「お、お前神様か？」

「ふん」

ジジイは鼻息を荒くして、口ひげを揺らす。

「そう思うならそれでも構わん。とにかく貴様には選択してもらわなければいかん」

「選択？」

周囲は相変わらず黄昏の空だ。俺とジジイは空中に浮かんだまま静止している。叩かれて痛いってことは、これ夢じゃねえんだよね？

「このまま地面に叩きつけられぐちゃぐちゃになって死ぬか、生き残るチャンスを得るか……　じゃ」

「よし、死ぬ！」

「ぶっ！」

ジジイは唾を飛ばす。

「き、汚ねえ！　なにすんだよ！」

「貴様はどうしようもないヤツじやのう」

ジジイは長くて白い眉毛を下げて、俺を哀れみの目で見る。

「チャンスとかめんどくせえ。どうせ生きてたっていいことなんか

ねえし、さっさと死んで生まれ変わった方がよっぽどいいし」

「生まれ変わったらミミズじゃったりしてな」

「う……」

それは想定外だった。

「蚊とかに生まれ変わって叩きつぶされたりしたりの」

「うう…… それは…… イヤだ」

「じゃろう？」

ジジイのドヤ顔がめっちゃムカついたが、ここは一応大人しく話を聞いておこう。

「チャンスってどんなんだよ」

「なあに、簡単じゃよ！」

ジジイは途端に顔中をしわだらけにしてニコニコする。くそつ、ぶつとぼしてえ。

「美少女を一人助けて欲しいんじゃよ」

「美少女？」

俺は思わず身を乗り出す。俺はこう見えても彼女いない歴〃年齢だ。

「うむ。さすれば貴様は生き残れるじゃろう」

「よし、乗った！」

「ぶっ！」

ジジイはまた唾を吐く。飛沫が顔に掛かって、俺は思いっきり学ランの袖で拭く。

「汚ねえからいちいち俺の顔に吹き出すなっつーの！」

「お前は本当に軽いのお。まあよい、詳しくは転生先で聞くがよい」
そういうとジジイは白い光の中へ溶け込むように薄くなっていく。

「お、おい、ちょっと待てよ！ 転生ってなんだよ！ 俺は何をすればいいんだよ！」

「一つだけ、貴様には特別な能力を与えておく。よく考えて使うがよい。ではなあ……」

ジジイの声にエコーが掛かって遠くなっていく。

「おい、ジジイ！ ハゲ！ おい！ お」

途端に体がかくんと落ちる。

俺はそのまま空をどこまでも落ちていった。

第2話 メイドと犬と眉毛

ぽやん。

ん？

ぽやんぽやん。

ん？

ぽやんぽやんぽやん。

んん？

何か柔らかくていい匂いがするぞ。

「う……」

「あ、気がついたですう」

目を開けると俺の目の前におっぱいがあった。

「うわっぷ！」

慌てて頭を上げると、白いエプロンに包まれた巨乳に頭が跳ね返された。

「あん、急に起きあがってはダメですう」

日曜の朝やつてる美少女アニメキャラクターのような声がして、俺の頭がまた柔らかいものに載せられる。フリル付きのエプロンに包まれた二つの巨大な盛り上がりの向こうに、まん丸い目をしたまん丸い顔の美少女がこっちを見下ろしていた。ほっかむりのような白い帽子の向こうに、青空が広がっているのかわかる。ツバメのような鋭角なシルエットを持つ鳥が一羽、白い雲を横切って飛び去っていく。

「え、ええっと……」

どうやら俺はこの美少女に膝枕されているらしい。なにこのいきなりの萌えシチュ。

「あは、さわさわの髪の毛心地よいですう」

俺は頭をなでなでされている。

ここはどうやら野原の真ん中のようなのだ。お乳、いや落ち着いてく

ると周囲に草の匂いが満ちていることに気づく。遠くで犬の鳴き声がして、美少女は撫でる手を止める。

「ゆっくり起きあがるです」

奇妙なしゃべり方をするこの女の子は、どうやら俺を介抱してくれていたらしい。

俺の頭の中にハゲジジイの声が蘇ってくる。

『美少女を一人助けて欲しいんじゃよ』

『詳しくは転生先で聞くがよい』

「あ、あのよ…… こ、ここはどこだ？」

「次は『わたしはダレ』って続くのですう」

イラッ！

「い、いや自分がダレかはわかってるって。お前こそダレだ？」

「うちはシヨコラですう」

「い、いや名前言われても」

少し心残りながら上体を起こすと、周囲の様子が漸く把握できた。どうやらやっぱりここは野原のようだが、少し傾斜している。緩やかな山の斜面のようだ。周囲には赤や黄色の花々が咲き乱れ、季節はどう見たって春。晩秋の日本ではない。学ランでは暑いくらい暖かく、俺は明るい陽射しに目を細める。

野原は校庭より少し広いくらいで、周囲は杉のような針葉樹林に囲まれている。森の中に開けた花畑のような場所だ。

女の子は満面の笑みで俺を見つめている。見た目はどう見ても、メイド喫茶のアルバイトコンパニオンだ。野生のメイドか？ 歳は中学生くらいだから、バイトはできないだろうけど。

脇に置かれた籐籠の中には、周りで咲いている花と同じものが数本横たえられていた。

「え、ええっと、シヨコラだったか？ ここは何ていう場所だ？」

「ここはエンジェルティア王国ですう。貴方は勇者さんですねえ？」

「え？」

目が点になった。

「勇者マサムネさんではないのですかあ？」

「な、なんで俺の名前知ってたんだ？」

「あは、やっぱりですう」

「むぐう！」

豊満な胸に抱きすくめられる。う、嬉しいけど苦しい！

「ちよ、もが、待て、ちよおっと待て！」

「あん、そんなとこ触っちゃダメですう。怒られるのですう」

俺はとりあえず乳地獄から脱出する。

「ふう…… ふう…… ゆ、勇者ってなんだよ。なんでお前は俺の名前知ってたんだ？」

シヨコラというこのメイドコス美少女は、満面の笑みでうんうん頷いている。

「言い伝えの通りなのですう。王国の危機に、神官のような黒い衣装を着て現れるのですう」

シヨコラは豊満な胸で両手を組んで、目にお星様をいっぱいキラキラさせて俺を見つめている。

「王国の危機で勇者？ つまり俺は、ロープレの主人公になっちゃまったってことか？」

「ろーぷれ？」

シヨコラは小首を傾げる。俺は巨乳好きだけどロリコンじゃないから胸がキュンとはしない。このドキドキはこれから始まる冒険への期待だ。たぶん、きつと、おそろく。

「そっかそっか！」

俺は尻や背中についた草つきれを払いながら立ち上がる。

「そんじゃまず国王様に会わないとな！」

「あは、話が早いですう」

シヨコラは籐籠を持って立ち上がる。ってちっちええ！ この娘の身長は、百七十八センチある俺の肩にも届かねえくらい小さい。胸は発育いいけど、やっぱロリだな。

「じゃ、うちがお館まで案内するですう」

「おう！」

てとてと歩き出したシヨコラの後について、俺はワクワクし始めた。

これから俺は国王様に会って、伝説の剣とかもらって冒険の旅に出る。ジジイの言ってた「美少女」ってのは、この娘ではないはずだ。俺はそんな単純じゃねえ。おそらく悪い魔王に囚われていて、勇者の俺が颯爽と助け出す。そんで魔王を倒して世界を救っちゃったりなんかしちゃったりして、美少女と結ばれるんだな。

くううう、いいねえ！

俺が握り拳で気合いを入れていると斜面の下、森の方から犬が走ってくる。さっきの鳴き声はこの犬か。

「あ、マサムネだ」

「は？」

今なんて？

「勇者様がいつか現れてくださるように、うちが名付けたですう。マサムネ〜！」

シヨコラは大きく手を振りながら走り出す。犬と名前が同じってどうよ。この娘はどうやら天然系の不思議ちゃんらしい……かわいいから、まあいいか。

「わんわん！」

「マサムネ〜！」

飛びついてきた犬（マサムネ、推定♂）を、シヨコラがしゃがんで抱きしめる。ちよつとだけ羨ましいと思ったのは内緒だ、ってえええっ？ 俺はマサムネ（犬、現在腰を振っている）を見て驚愕した。

「な、なんだその犬！ ま、眉毛あんじゃん！」

なんと薄茶色で尻尾の大きなその犬（マサムネ、推定雑種）には、ふさふさとした逞しい眉毛が生えていた！

「へ？ 犬には普通眉毛があるですう」

「ねえよ！」

俺はこの異世界のことを、まだ何も知らないのだった。

第3話 危険なドラゴン

「らんらんるー」

「はぁ」

「わんわん」

半分スキップしながらシヨコラはずんずん森の小道を歩いていく。マサムネ（犬眉毛付き）は、時折俺の方を振り返って凜々しい顔で様子見をする。

「キリッ」とか擬音が聞こえてきそうで、その顔を見るたびにイラッとする。

「なぁ、その“お館”ってのはどこにあんだよ」

「もうすぐですう」

「わん（キリッ）」

イラッ！

森の木陰道は涼しいが、普段運動不足プラスニコチン漬けの俺にはけっこう堪える。そういえばタバコ買えなかったなぁ。

犬っころにいちいちイライラするのは、きつと禁断症状だ。この国にタバコかそれに代わるものってあんのかな。

「なぁ、シヨコラつつったか」

「はいですう」

「わん（キリッ）」

「いちいちお前が返事すんな！　なぁ、お前あんなところでなにしてたんだ？」

「あは、お花を摘んでたですう」

「花？」

まるで童話の世界だな。魔王に世界を滅ぼされようって時に、こんな小さな女の子一人で山なんか花摘みに出ていいのかよ。

「うちは王女様専属の侍女なのです。お花を王女様のお部屋に毎日飾るのは、うちの大切なお仕事なのですきりっ！」

「王女？」

何か話が違ってきたぞ？

「王女ってあれだよな、国王の娘」

「あは、勇者様は面白いのですう。他に王女様って呼ばれる方はいらっしやらないのですう」

「わん（キリックス）」

「あ、い、今この犬笑ったぞ！」

マサムネ（犬畜生）は、口の端を持ち上げて牙を見せた。あの表情は絶対に笑顔だった。しかも不敵な。

「あはは、犬が笑うわけなのですう。マサムネは楽しい時には尻尾を振るですう」

「いいや、絶対笑った！ この犬絶対笑ったって」

「あそこがお館ですう」

俺の主張を華麗にスルーしたシヨコは、森の切れたところで下方を指さす。そこにはまさに大豪邸と言って差し支えない建物とそれを取り巻く綺麗な庭が一望できた。

「で、でけえ」

「ここから見える範囲は、ぜんぶ国王様の私有地なのですう」

「ま、まあ一国一城の主だからな。そ、そんな金持ちなのはあ、当たり前だよな」

正直俺は気後れしていた。今までの十七年間の人生の中、いわゆる上流階級と呼ばれる人種との接点は一切なかった。せいぜいテレビでみる豪邸訪問やセレブタレントぐらいだ。

「“いちじょう”ってなんなのですかあ？」

「かあ、お前そんなことも知らねえのか？ 一城つつたら城に決まってるんだろ。お城だよオ・シ・ロ！」

「おしろ？ マサムネ知ってるですかあ？」

「クウーン」

こいつ城も知らねえのか？ そんなんで魔王の攻撃をしのげると思ってるのか？ やっぱりここは、勇者の俺が城の造り方から教え

てやんねえといけねえらしいな。

そうは言っても、俺に築城の知識なんかあるわけもない。小学生の時、一時期クラスで流行ったプラモデルの大阪城作ったくらいだしな。

まあいいか、国を守るのは王様の役目。勇者の俺はどうせすぐ旅に出ちまうんだからな。

「おし、さっさと行こうぜ！ だいたい二キロってどこか？」

「“きろ”ってなんですかあ？」

ちっ、単位まで違うのかよ。これだから異世界はめんどくせえ。

そんなくらい融通効かせとけよな。話が長くなっちゃうじゃねえかよ。

「あゝ、俺のいた世界での距離の単位だ。こんくらいが一メートル、その千倍が一キロメートル」

「ふうん、変わった単位ですねえ」

「ここじゃなんて言うんだよ」

「ここはヤード・ポンド法ですう」

「ふうん、そうか…… って、めっちゃ共通点あんじゃねえかよ！」

「あはは、冗談ですう！ メートル法も通じるですう」

シヨコラは笑いながら、マサムネ（犬、現在こっちを見てまたクスツと笑っている）と坂道を駆け下りていく。

「くっそ、待てごるあっ！」

俺は半分マジでキレて追いかける。あれ？ 何か大事な話の流れがあったような…… そんなことが一瞬ちらっと頭をよぎったが、すぐに俺は忘れ去ってしまっていた。

坂道の下の林を抜けると、かなり広い芝生に出る。ここはさっきの野原の五倍以上は確実にある。まるでゴルフ場だ。しかしゴルフ場にしては、そこら中やたらと穴が空いている。といってもそれほど大穴ではなく、大きめのスコップで掘ったくらいの小さな穴だ。

さらにでかい糞が落ちている。明らかに人間のじゃなく動物ののだ。しかもかなり大型の。かなり臭えんじゃねえかと思っただが、思った

よりは臭くない。どちらかというところ、草の匂いに似ている。

シヨコラとマサムネ（犬、すでに俺の存在は忘れているようだ）は、楽しそうに先を走っていく。ちょっと待て、勇者様を案内するんじゃないかったのか？　こんな糞だらけの場所に置いてきぼりにするってどういう……ん？

俺はいきなり辺りが真っ暗になったことに気づく。すると突風が頭上から吹き付け、芝生が一斉に同じ方向へ倒れる。

「う、うわっ！」

「ぎょええええっ！」

甲高い鳴き声がして頭上を仰ぐと、空から青いドラゴンが下降してきた。って、ええええっ！　ド、ドラゴン？

体長五メートル、翼長十メートルほどのブルードラゴンは、俺の前に重々しい音をさせて着地する。青い鱗が日の光をきらきらと反射して、すごく綺麗だった。

ドラゴンはぎょろりとした目で俺を見つめ、広げていたコウモリのような膜でできた翼を畳む。俺の腕ほどもある長い三本の爪を芝生に突き刺し、ゆっくりと長い首を持ち上げる。

ああ、周りに空いてた穴や糞は全部こいつのだったんだな。

俺は金縛りにあったように身動きが取れない。恐怖もあったが、何よりも驚愕が一番大きい。非現実的なその存在感は、巨乳ロリ美少女の膝枕や眉毛のある犬より圧倒的にここが異世界だということを教えてくれる。

「わん」

気がつくともサムネ（犬、怯える俺をドヤ顔で見上げている）が、俺の足に胴体を擦りつけていた。

「ああ、ここはドラゴンの発着場なんですう」

シヨコラが満面の笑みで戻ってくる。

「は、発着場？」

つまりこの恐ろしい生き物はこの世界の人間が飼い慣らしていて、しかも乗用しているらしい。ま、まじかよ……俺はドラゴンが今

にもファイヤーブレスとか吐くんじゃないかとドキドキしていた。
こういう時は急な動きをしちゃいけないんだ。そこで、目は合わせない！

「ドラゴンはとっても大人しい草食動物なのですう、危険なことはないのですう」

シヨコラはそのままドラゴンの前足を撫でる。

「くうくん」

ドラゴンは甘えた声を出し、シヨコラへ鼻先を擦りつける。

「なんだ、めっちゃ安全な生き物じゃねえか。ビビッて損したぜ」

「そうですう、ドラゴンは絶対に人を襲ったりすることはないんですう」

そう言われるとドラゴンにも愛嬌を感じ始める。うんうん、ドヤ顔する眉毛のある犬よりよっぽど安全で可愛いヤツだ。

「この子の名前はベクレルっていうですう」

「名前はめっちゃ危険じゃねえか！」

「あ、プルトニウムも来たですう」

俺は空中で着陸態勢に入った赤いドラゴンを見ながら、軽い目眩を覚えていた。

第4話 王様と王妃様

「ほうほう、そなたがマサムネ殿ですな！」

俺の前では、派手な服を着た恰幅のいいオッサンが満面の笑みを浮かべている。オッサンの名前はラグランジェⅡエンジェルティア。つまりこの国の王様だ。

俺はシヨコラに連れられ、宮殿みたいなドデカイ建物に來た。蔦の絡まる白亜の建物は、年月と威厳を感じさせた。本物のメイドさんが忙しそうに動き回る中を歩き、奥まった広い部屋に通された。シヨコラによれば「謁見室」というらしいが、現代日本風に言えば「応接室」のようなものらしい。シヨコラいわく、「王様とお話しするお部屋ですう」ということだ。

腰まで沈み込むほどふかふかのソファに座って三十分ほども待たされると、王様と王妃様らしい人たちが俺の前に現れた。

王様はニコニコと人の良さそうな笑顔で俺に握手を求めてきたが、王妃様の方は妖艶に微笑んだまま王様の後ろに立っていた。

ってかすっげえ美人だし！

派手な服着たメタボ中年にしか見えねえ王様が、よくこんな美女と結婚できたのか不思議でならなかった。

大きなアーモンド型の目には、バッサバサ動く黒いつけまつげが翼のように付いている。卵形の顔は愛らしいが、真っ赤に口紅の塗られた肉厚の唇はかなり情熱的な印象を受ける。口元のほくろも色っぽい。

胸は間違いなくGカップ以上はあるだろう。ワインレッドのスパコンコールがきらきらするドレスの胸元からは、恐竜の卵みてえな谷間が「こんにちは」している。

きゅっと締まったくびれと豊満な尻。あれに比べたら、シヨコラの膝枕なんて低反発枕だな。もはや何を言っているのか自分でもわからなくなってきた。

とにかく非常に妖艶でフェロモンバリバリな王妃様なんだが、いかんせん歳がいきすぎてる。俺に熟女趣味はねえ。いくら美人でグラマーでも、オバサンはちょっと勘弁だ。

「マサムネ殿？」

オッサ…… もといエンジェルティア王が不思議そうな顔で俺を覗き込んでいた。いかんいかん、集中しないと。

「あ、ああ、すんません」

俺は王様に頭を下げながらも、俺を見ている王妃様の艶っぽい視線が気になってしょうがなかった。

「――で、シヨコラが発見したということですか」

いつの間にか王様の話は始まっていたみたいで、俺は前半部分を完全に聞き逃していた。

「は、はあ」

王様は俺のテーブルを挟んで対面にあるソファにでっぷりと座り、丁寧に整えられた口ひげを揺らせている。口を動かすたびにぷるするもんだから、気になってしょうがねえ。

「それで、貴方はどこからいらしたのかしら？」

王妃様が俺から目を放さず、色っぽい声を出す。うほっ、やっぱり見た目通りの声だな！

「えっと、に、日本っす」

「日本？ それはどこにある国ですか？」

「ええっと、たぶんことは違う世界っす」

「違う世界？ 異世界ですか？」

俺にとってはここが異世界なんだけど、まあそういうことなのかな。

とりあえず俺は頷く。

「ふうむ、即座に信じることはできませんがそんなこともあるのかもしれませんな」

「中坊追っかけてたら車に撥ねられて、変なハゲジジイに美少女を

助けたら命を助けてやるってドヤ顔で言われて気づいたらシヨコラに膝枕されてました」

王様と王妃様は哑然として俺を見つめている。入り口の脇に控えている派手な服を着た護衛の兵士らしいヤツが、若干身動きする。

「あ、あ……」

王様は椅子から腰を浮かし、俺の方へ身を乗り出す。な、なんだよ？

「も、もしかして、そのご老人はあの方ではなかったですか？」

王様は俺の後ろを指さす。入ってきた時は気がつかなかったが、俺の後ろの壁には天井に近い位置にあのハゲジジイの肖像画が掛かっていた。妙に偉そうな顔にイラッとした。

「あああゝ！ そう、そうっす！ こいつっす！」

俺は立ち上がってジジイの絵を指さす。

「やはり！ いや、あなたのおっしゃることを信じますぞ！」

王様は興奮して、またもやヒゲをふるふる揺らしている。顔は興奮して真っ赤だ。

「あなたが救世主だったのですな！ いやはや！ 身なりは言い伝えの通りでしたが、このような若い方だとは思ってもありませんでした！ 疑うような質問をしてしまい、失礼しました！」

王様は俺の両手を握って激しく上下させる。

「わたっ、わたたっ！ そ、そうっすか、それはよかったっす。んであのジジイなんなんすか？」

「あの肖像画の方はポニヤックⅡエンジェルティアと言い、わしの三世代前の国王になります」

「な！ んじゃあ、神様じゃねえのかよ！」

あんな現れ方するから、俺はてっきり偉い神様かなんかだと思っちゃったぜ。まあ全然偉そうじゃなかったけどよ。それにしてもポニヤックって！ 今度会ったらバカにしてやろう。

「いやいや！ ポニヤック王はこの国開闢以来の大魔法使い様でした。特に召喚魔法においては、まさに神の領域に達しておられた

方だと聞いております」

「あのハゲジジイがあ？」

召喚魔法とやらが何のことか知らねえが、俺をこんな世界に連れて来るぐらいだからまあ確かに変な力はあるんだろうな。まああんなジジイのことはどうでもいい。それより美少女だ。

「それで俺が救い出す美少女って、どこに囚われてんすか？」

「囚われる？」

王様の動きが止まる。王妃様の微笑が消え、眉間に若干シワが寄る。ちよ、その顔まじで怖えっすよオバサン。

「姫は囚われてなどおりませんぞ？」

「へ？」

その時部屋の扉が勢いよく開かれ、金髪碧眼の絶世の美少女が入って来る。その後ろでは、扉にノックダウンされた兵士が目を回して倒れていた。

第5話 伝説の始まり

「お父様！」

美少女は切れ長の目をさらに吊り上げ、細い肩を怒らせてずかずかと足音を立てて突き進んでくる。どうやら何かはかなり腹を立てているようだ。

「あの男はなんなんですか？ 『君は宝石のように美しい』だなんて！ わたくしを鉱物資源に例えるなんて、デリカシーがないにも程がありますわ！」

「こ、これ、レオナ！ お客様がいらっしゃってるのにいきなり失礼ではないか」

王様は慌てて立ち上がる。

お父様ってことは…… まさかこの美少女が王女様？ あれ、何でここにいった？

レオナと呼ばれたその美少女は、俺の方をちらっと見ると「フンッ！」と鼻を鳴らす。

「こんな小汚い男が客だなんて、お父様もお暇なのね！ とにかくあの男はさっさと首にしてください、いえ、首では生ぬるいわ。一族郎党皆殺しよ！」

「まあまあレオナ、話をしよう。マサムネ殿、すまぬがこの後の話はフィオーナに聞いてください」

呆然と立ち尽くす俺を置いて、王様は頭から湯気を出していそうな王女の肩を抱いて部屋を出て行ってしまふ。扉が閉まると後に残されたのは俺と王妃様、そして氣を失ったままの兵士だけだった。

「ふう、びっくりなされたでしょう？ とにかくまあお座りになつて」

「は、はあ」

「誰か！」

王妃様はテーブルの上にあった小さな鐘を鳴らす。カランカラン

と小気味良い音を立てると、奥の小さな扉からメイドさんが出てくる。一瞬シヨコラかと思ったが、違う女の子だった。

「お茶をここへ。ああ、あと侍医を呼んで、ラオスがまたノックアウトされたわ」

「畏まりました」

シヨートカットの黒髪をしたメイドさんは、丁寧にお辞儀をして足音をさせずに出て行く。王妃様は振り返ると、微笑みながら俺を見る。

「ごめんなさいねえ、いつものことなのよ」

「あ、あの、話が見えないんすけど……」

「そうですわね。お茶を飲みながらゆっくりお話しますわ」

「は、はあ」

もう俺は「は、はあ」しか言えない人形になった気分だ。

王女は確かに美少女だったが、魔王とかに囚われてるわけじゃなかった。それどころかめっちゃわがまま娘のようだ。いくら美少女でもあれは勘弁だな。よほどDM趣味じゃない限り、あの性格じゃ精神ズタボロにされちまう。

メイドさんがピカピカに磨き抜かれたワゴンを押して部屋に入ってくる。俺と王妃様はメイドさんがお茶を淹れ終わるまで黙って座っていたが、メイドさんが一礼して部屋を出て行くと王妃様は改めて口を開く。

「さて、申し遅れましたがわたしはこの国の王妃、フィオーナ＝エインジェルティアと申します」

「は、はあ」

俺はぎこちなく座ったままお辞儀する。この国の王妃様なんて偉い人なんだから、本当は立ってお辞儀しなきゃなんないだろう。でも俺はこの国の国民じゃない。いや、この世界の人間ですらない。なので王様が言ってたように、あくまでもお客さんとして対応すべきなんだろうな。とりあえず。

「まずは、王がおっしゃっていた『救世主』についてです」

「は、はあ」

「この国は非常に危険な状況に追い込まれています」

「は、はあ…… って、はあ？」

おし！　ようやく話が進んできたぞ。

「あれっすか？　悪い魔法使いに滅ぼされようとしているとか、強いドラゴンが暴れまくってるとか」

「いえ、我が国はそういう意味では非常に平和、平穏無事でありますわ」

「あれ？」

俺はがつくりする。んじやなんだってんだよ。

「危険な状況というのは、わたしの娘…… レオナです」

「は、はあ」

やつぱりこれしか出ねえな。俺は目の前で湯氣を立てる上手そうな紅茶らしき飲み物を一口飲む。

「熱っ！」

「ご覧の通りとても…… いえ非常にわがままじゃじゃ馬でおてんばです」

「はあ、そんな感じっすね」

「遅くに授かった一人娘で、わたしも王もレオナを目の中に入れても痛くないほどかわいがって育ててきました」

「いや目ん中入れたら痛いっすよ、普通」

「おだまり」

「はい」

ひえっ、一瞬空気が凍ったぞ？　このオバサンには冗談通じねえんだな、よく覚えておこう。

「それで成人するに当たって、王は社交界や政財界へ出ても恥ずかしくないように教育を施すことにしました」

「いわゆる家庭教師っすか？」

「最初は…… そうでした。しかしそれも一週間経たずにすべて辞めてしまいました」

「それは…… 辞めさせられたってことっすね」

王妃様は頷く。まああの調子じゃ相当わがまま言っただらうな。ご愁傷様だな。

「ところがレオナのわがままはわたしたちが思った以上でした」

王妃様は綺麗に整えられた眉根を寄せる。それが妙に艶めかしくて、俺はこっそり生唾を飲み込む。

「家庭教師に留まらず、身の回りの世話をする侍女たちにも当たり散らすようになったのです」

「はあ、あれっすね。八つ当たり」

王妃様は少し首を捻るが、小さく頷く。

「まあそんなところでしよう。家庭教師たちのやり方にも問題はあったでしょうが、レオナのストレスはかなり大きいのです」

「ストレス…… っすか」

まあそれは俺もよくわかる。それで大暴れしちゃったしな。

俺はその時初めてあの美少女王女に同情した。

「今では王女の身の回りの世話はシヨコラ一人。護衛でさえ女性の剣士一人しか認めません」

「後はみんなこれっすか？」

俺は手を首に当てて横に引く。つまり「クビ」って意味だ。

王妃様は頷くのとため息をつくのを同時に行う。白く巨大な谷間がふるふると揺れ、俺の目はそこに釘付けになってしまう。

「我が王家にはポニャック王の予言があるのです」

「予言…… っすか」

王妃は俺を潤んだ瞳でまっすぐと見つめる。ちょっと恥ずかしくなっちゃって、俺は若干視線を逸らす。

「『王女を立派な淑女として成人させないと、この国はいずれ滅びるであらう』…… と。そして『マサムネという名の神官のような黒衣を着た異世界からの男が、この国を救うだらう』とも」

「えええっ？」

あのジジイ、俺をこの世界に送ったのはそういうことだったんだ

な！

変な力のあるあのハゲジジイのことだ。俺を送り込んだ後に、予言とやらを時間を前後させて変えるなんて朝飯前だろう。つまり俺をこの世界に送ることを決めた時、あいつは過去の予言を変えやがったんだな！俺にはジジイが舌を出す光景が目に見えるようだった。

「予言は言い伝えとなって代々受け継がれてきました。あなたが予言通りの救世主ならお願いします。あの娘の執事となってこの国を救ってください！」

「どええっ？」

こうして俺の『最強執事』伝説が始まった。

第6話 王女レオナⅡエンジェルティア

「レオナ様、お夕食の時間でございます」

俺は腰を四十五度の角度で曲げて、深々とお辞儀する。

「要らないわ、食べたくないの」

俺の前には豪華な金髪を波立たせた絶世の美少女が、つんとそばを向いている。彼女はレオナⅡエンジェルティア。このエンジェルティア王国という異世界の国の正統な王女だ。国王には正統な世継ぎがおらず、一人娘のレオナがこのまま成人すれば女王としてのこの国の頂点に立つことになる。

「そうおっしゃらず、ぜひお出でください。国王様も王妃様も、レオナ様と夕食を共になされることを楽しみにしておりますよ」

「うるさいわね！ 要らないったら要らないのよ！」

レオナは豪華な一人がけソファの肘掛けを強く叩くと、立ち上がってテラスへ通じる大きな窓際へと歩いて行ってしまふ。

ちっ、ムカつく。でもここは我慢、我慢。

俺はこのわがまま王女の執事としてこのお屋敷で働き始めた。この二日間というものの、この娘には翻弄されっぱなしだ。

元々執事なんてやったこともない不良学生の俺が、見よう見まねでやっても上手くいくはずはない。

執事…… 高位の家で家政や事務を執りしきる者。

俺はアンネラというメイド長に、一通りの仕事についてレクチャーを受けただけだ。とりあえず見た目だけはそれっぽくなった。

仕立てのいい生地のスーツにレース装飾のついた白いワイシャツ。清潔な靴下と磨き抜かれて黒光りする革靴。執事以外じゃホストにしか見えねえ。

俺に与えられた役割は、執事本来の仕事とは大きくかけ離れていた。

王女様を淑女にすること、物わकारのいい素直な女の子にすること。

と。ただそれだけ。

本来なら国政に関わる事務仕事なんかもあるらしいが、そういうのはお屋敷の専門的な事務方がやってくれる。

身の回りの世話は女性のレオナには女性の侍女がつく。それがシヨコラだ。男の俺は侍女にはなれない。そうなる正式に教育係としてレオナに納得させるためには、執事という身分しかなかったのだ。

勉強が苦手な俺としては、余計な仕事がないってことはありがたかった。だがレオナを淑女にするって仕事は、執事本来の仕事より遥かに難しいことだと身に染みてわかった。

そう、まさに身に染みて。

俺は王女から数メートル下がった位置で、なおも食い下がる。今日こそは何か一つでもいうことを聞かせたい。

「レオナ様、今日はレオナ様の好物である魚介類のパスタが出されるそうですよ？」

レオナは一瞬形のいい眉毛をぴくりと動かす。しかし一秒後には「フンッ！」しか返って来ない。

俺は心の中でドナドナを歌いながら、沸騰しそうになる頭を冷やす。

怒っちゃダメだ、怒っちゃダメだ。可哀想な小牛の目を想像しろ！
涙を浮かべてふるふる小さな体を震わせて、荷馬車で送られていくんだぞ？ 売られちゃうんだぞ？ 哀しいよな？ 切ないよな？
？ だったらその程度で怒んじゃねえよ、俺。

「だいたいあんたは何にもできないくせに、なんで執事なんかやってるのよ！ 粗野で乱暴で変態で人外で野獣でオークでトロルな変態よ！」

「レオナ様、『変態』が二度入っておりますたよ？」

「フンッ！」

俺はこめかみをピクピク痙攣させ、口角を震わせながら何でもないことのような表情を取り繕う。本当は今にもキレそうだったんだ

が。

柔らかな布に包まれた豊かな胸が、荒い鼻息に合わせてぷるんと揺れる。シヨコラほどではないが、レオナの胸も巨乳と言っているくらいでかい。いやレオナの場合美巨乳か。性格同様つんと上を向いた双丘の頂は、服の上からでも居丈高だ。

レオナは白いレース地の内着に、レモン色のフリフリのロングドレスを着ている。手には肘まである白い絹の長い手袋を嵌めていて、直に物に触れることはない。

こういう少女漫画に出てくるような王女様は普通くるくるパーマでドリルもみあげだったりするのだが、レオナの髪はストレートで背中の真ん中ほどもで長い。うなじのうしろでデカイ宝石をまぶした髪留めで一つに纏め、残りは馬の尻尾のように自然に垂らしている。朝晩とシヨコラに二時間近く手入れさせている自慢の金髪だ。

見た目は完璧にセレブ美少女。しかし中身は超絶わがまま娘だ。アキバあたりに行けばそういう王女様のヒールに踏まれて喜ぶ輩もいるだろうが、残念ながら硬派な不良を自認している俺にはそんなドM趣味はない。罵倒されて恍惚になれる変態ではないのだ……たぶん。

「あなたはブタよ、家畜よ、フンよ。生きる価値もないわ。だから今すぐここから出て行きなさい。いいえ、むしろ死んで」

「レ、レオナ様、そ、それは少し言い過ぎでは？ フンに至っては生物ですらありません。排泄物です、もはや死ねません」

「だったら畑の肥料になるなりすればいいわ！ その方がよっぽど世の中の役に立つわよ、この腐れ外道！」

俺は頭の中で何かがぶち切れた音が聞こえた。

「がああっ！ 黙って聞いてりゃこのクソアマ！ 言うに事欠いて腐れ外道だのフンだの、もう許せねえ！」

「フンッ！ ほら、そうやってまた本性を現したわね、野獣！ 許せないって、いったいどうするつもり？」

「力づくで言うこと聞かせてやるあ！」

俺は腕まくりしてレオナに近づく。するとレオナは右手を俺の方へすっと伸ばし、手のひらを向ける。

「マンティコア！」

「やべっ！」

ブチキレていた俺は我に返って踵を返す。またやっちゃまった！

俺の視界の端には、レオナの手のひらの真ん中に光るエメラルドグリーン

の光が見えた。

次の瞬間、俺は巨大な獣の足で床に踏みつけられる。

「ふぎゃ！」

「ぐわおおおうっ！」
俺を踏みつけていたのは体長三メートルはありそうな人面ライオン。尻尾はトゲトゲのハンマーみたいになっている。

レオナはなんと召喚魔法の使い手だった。ハゲジジイの劣性遺伝子がそうさせるのか、その能力はこの世界でもトップクラスだという。どおりで今まで誰も言うことを聞かせられなかったってわけだ。俺はレオナの執事になってから、毎回神獣やら幻獣やらの餌食にされていた。

「マンティコア、やっておしまい！」

「ぐわおおおうっ！」

「ぎゃああああっ！」

俺はケツに食い込むモンスターの牙に意識が遠のくを感じる。

「さ、魚介類のパスタをいただきますしよ」

俺はカツカツとリズムカルにヒールを鳴らして歩いていくレオナの後ろ姿を見送りながら、伸ばした右手が力なく落ちるのを見た。

「もういっそ殺してくれ……」

「ぐわおおおうっ！」

「ぎゃあ！」

レオナの颯爽とした後ろ姿は、そのまま無情にも閉じられたドアの向こうに消えていった。

第7話 エルザⅡアマンディア

「あああつ！ もうやってらんねえ！」

俺は濃紺の空に瞬き始めた星空を見ながら、大きくため息をつく。だいたいあのわがまま娘をどうにかしようってのが間違いだ。ああいう女は一度痛い目を見ねえとわかんねえんだ。自分がどれだけ恵まれた環境にいて、周囲に守られて生きていられるのかって。

俺はふと元の世界を思い出す。あそこは最悪のクソみてえな世界だった。俺には居場所がなかった。成績とか世間体とか、そういうもんばかりに価値を置くクソ親ども。いつも冷たい視線で俺を見下すクソ教師ども。ロボットみてえに親の言いなりになってる優等生の兄貴。どういつもこいつもカスだ。

「あ、見つけたですう」

入り口からシヨコラが顔を出す。この屋上は俺のお気に入りだ。タバコがあれば最高なんだが、どうもこの世界にはタバコはないらしい。学校の屋上が懐かしいぜ。

シヨコラはスカートのフリルをふわふわさせながら歩いてきて、俺の隣へ腰掛ける。

「おい、仕事はいいのか？ 今レオナは飯食ってんだろ？」

「お食事中は給仕さんたちがいるからいいんですう。レオナ様のお食事が終わるまで、自由時間なんですう」

そう、レオナ専属のシヨコラに個人で自由に使える時間は非常に少ない。一日三食の食事時と寝てる時くらいだろう。俺を見つけた時は、レオナに花を摘んでくるように言いつけられていたらしい。そんな時でないと外出さえままならない。まさにレオナのために生きてるようなもんだ。

「お前は飯食ったのかよ」

「うちは今ダイエット中ですう」

シヨコラはニコニコして頬に手を当てる。シヨコラは巨乳だが、

全体的には幼児体型だ。でもそれは太ってるってわけじゃない。まあ「脱いだらすごい」のかも知れないが。

「なあ、お前腹立たないのかよ。あんなわがまま娘に付き添って」「レオナ様はとても純粋でかわいらしい方ですう。みんな誤解してるのですう」

「誤解ねえ……」

俺はため息をついて夜空を見上げる。こうして仰向けになって寝転んでいると、宇宙に吸い込まれちまうような気がする。昔から星は好きだった。

「レオナ様はお寂しいんですう。国王さまも王妃様もお忙しくてえ、昔から遊び相手もいらっしやらないしい」

「遊び相手ねえ」

俺はあいつの玩具なのかもしれねえな。

「だから魔法でえ、いろいろな獣を呼び出して遊ばれてたんですう」

「あの化け物どもは、あいつの遊び相手かよ。すげえな」

今もまだケツが痛え。お陰で腹も減らねえし。

「でも最近のレオナ様は楽しそうですう」

シヨコラはニコニコして俺を見ている。あー、あれだ。俺という玩具が手に入ったからだな。

「こっちはお陰で生傷だらけだっつーの！」

「マサムネさんはあ、今までの執事さんと違って我慢強いですう」

「はっ！ あんなんされたら、普通は逃げ出すわな！」

俺は逃げたくても逃げられない。ただそれだけのことだ。なにせミミズとかオケラにはなりたくねえしな。

「で、お前は何の用で俺を捜してたんだ？」

「あ、そうですう。エルザさんが捜してたですう」

「げっ！ あの女が？」

エルザとはエルザIIアマンディアといい、レオナ専属護衛の女剣士だ。身長は百八十センチ近くあり、褐色の肌に筋肉ムキムキのマツチヨウマンだ。何でも南方の国からわざわざこの国に出仕を申

し出てきたらしく、その腕前は滅法強い。おそらくレオナの召喚獣ともいい勝負ができるだろう。

俺はあの女が苦手だ。

「やべっ！ ショコラ、ここに俺がいること黙っててくれよな！」

「うーん…… でも見つけてしまったしい、うちは嘘つくのはイヤですう」

「後でお礼するから！ な？」

「うーん……」

ショコラは口を尖らせて唸っている。俺はショコラの気を逸らすことにした。

「そ、そういえばショコラってフルネーム聞いてなかったよな。俺当ててみようか？」

「ええ？ わかるんですかあ？」

案の定ショコラはのってきた。俺はショコラのフルネームは知らないが、適当に言えば気も逸れるだろう。

「ショコラ＝デニッシュ！」

うは、超テキトー！ でも好きだからいいや。

ところがショコラは目と口を○の字にして動きを止めている。

「な、なんでわかったんですかあ？ 誰かに聞いたんですかあ？」

ぐはっ！ 当てちゃったよ！ ってか、名前までお菓子系かよ。

「ああっ！ いた！」

入り口からぬうつと大きな影が現れる。俺はそれが誰なのか一発でわかった。

「お前、仕事さぼってそこで何やってんだよ！」

蛍光灯のような明るい月明かりの下、燃え立つような金髪と青い瞳。黄金の鎧に身を固め腰には長剣を下げている大柄な女剣士。

「げっ！ エ、エルザ！」

エルザは入り口を塞ぐように腕組みをして俺を睨みつけている。逃げ道はあそこしかない。それがわかってそこに仁王立ちしているのだろう。

「レオナ様が食事を終えられるまでに、本を部屋に運んでおけって言われたろう？ オレだけにやらせる気かよ！」

エルザは見た目にそぐわず言葉遣いは男っぽく、自分のことを「オレ」と言う。それが妙に似合っていて男前だから困る。

「ま、まだ時間あるだろ？ あいつはさっき飯食いに行ったばっかだぞ？」

「なんでも食事が口に合わなかったとかで、もう部屋にお戻りになってるんだよ！ 本がないってご立腹だ！」

「くそっ、あんのクソアマ」

俺は立ち上がって後ろ頭を掻きながらエルザの方へ向かう。エルザはムツとした表情で俺に道を譲ったが、すれ違いざま俺の股間が鷲掴みされる。

「うごっ！」

「それと、レオナ様に対する口の利き方に気をつけるんだな。オレの目の黒いうちは、レオナ様に対する暴言は許さねえからな」

エルザは大きな手で俺の股間を強烈な握力で握りつぶそうとする。

「うげっ、わ、わかった！ わかったって！ うがあ！」

エルザはにやつと笑って俺の耳に口を寄せる。こんな野蛮な女でも、近づくといい匂いがする。

「レオナ様に手を出したらオレが許さねえからな。もしどうしても我慢できねえなら、オレがいつでも相手してやるぜ。カラツカラになるまで搾り取ってやるからな」

手！ 手を動かすな！ あ、ああ……

俺にMっ気はなかったはずだ。しかしエルザの手技はハンパない。抵抗する気力そのものが萎えてしまう。

「あああ、エルザさんだめですう！ マサムネさんをいじめては、うちが怒るのですう！」

俺とエルザの周りを、シヨコラが腕をわにわに動かしながら走り回る。

「その割りには反応してるぞ？ おらっ、うりうりうりいいいい

い
〜!
」

「うぎゃあああつ、ふうふう〜……」

俺は遠くなる意識の向こうに、栗色の花畑を見た。

第8話　フィオーナのお願

「よっこいしょっと！」

我ながらオヤジ臭えと思いつつも、声を出さずにはいられない。エルザに悶絶させられた後大量の本（しかも全部ハードカバー）を運ばされ、腰がめりめり言っている。体力にはそこそ自信はあるが、もともとやる気がないだけに疲労は二倍だ。

しかし、どうしたもんか。あのわがまま娘を淑女にするなんて、絶対無理だと思えない。さっきだって頭三つある犬の化け物：ケルなんとかってヤツに追い立てられたし。お陰でエントランスと三階にあるレオナの部屋を何往復も走って運ばされた。

「くっそ！」

俺は風呂上がりの濡れた髪を、わしゃわしゃとかき乱す。こういう時マンガとかテレビがあれば気を紛らわすことができる。ケータイでもいい。アプリとかやってれば、少しは嫌なことを忘れられる。でもこの世界にはそんなものはない。せいぜい小難しい本くらいだ。俺は絵のない本は大っ嫌いだ。一ページ目で寝られる自信がある。

だからこうなるともう寝るしかすることがない。

「はあ、明日は数学の家庭教師が来るんだっけな……」

レオナが暴走しないように、その間付き添ってないといけない。

お茶やお菓子を出したりって仕事もあるし。

「ふあ……」

慣れない執事生活のためか、最近ベッドに横になるとすぐに眠気が襲う。宵っ張りだった俺も健康的になったもんだ。

俺の部屋はメイドや執事などが使う使用人用の部屋だ。両隣は国王付きの執事と秘書官。どっちも中年というには若く、青年というには歳を取っている。三十くらいか？　はつきり言って話をしたこともない。するヒマもねえし。

忙しいのか、どちらも部屋に戻るのは遅い。遠くでドアの閉まる音を聞きながら、俺は夢の世界へ堕ちていった。

むに。

「ん……」

むにむに？

ん、なんだ？ 何か柔らかいものが俺の顔に……

むにゅうう！

「うわっ！」

俺は起きあがろうとして巨大な柔らかい物体に押さえつけられる。同時に香水らしいいい匂いが鼻孔を満たし、息も苦しくなる。

「あら、起きてしまわれたんですね？」

こ、この声は……

懸命にずり上がってその巨大な柔らかい物体から頭を出すと、そこにいたのはあの妖艶な王妃フィオーナだった。ってことは俺を窒息させようとしているこの物体は……

「あん、マサムネさまの吐息がくすぐったいですわ」

ち、乳か！ 押しのけようとした俺の手が空中で止まる。触ったら大問題だ。いや、思いつきり顔が埋まってるけど。

「な、なんすか？」

「あらあ、こんな夜中に殿方の部屋に来た理由を女に聞くなんて野暮ですことよ？」

フィオーナは艶めかしく赤いルージュの引かれた口角を持ち上げる。俺の防衛本能が「喰われる」警告を発している。健康な男子高校生であるからには女に興味がないわけではない、いや、正直興味津々だ。右手以外の彼女ができたことは今までないが、それ相応の知識はある。

それでも王妃なんて立場でしかも熟女は俺の守備範囲外だ。いか

に美人でいい身体をしていたって、人妻に手を出すほど飢えちゃいねえ。

「ま、ま、待ってください。は、はな、話せばわかります!」

「あらあ? 何か素敵な夜伽話でもしてくださるのかしら? ふふ、雰囲気盛り上げるのにはいいわね」

そういうとフィオーナは漸く俺の上から豊満な身体をどかしてくれた。

フィオーナはシースルーのナイトドレスを身に着けており、その下の黒い下着が丸見えだ。エンジ色の裾の長い上掛けを羽織っているが、前面をがばっと開けているために何も隠せていない。

俺はぐくりと唾を飲み込み、何を話そうかと思案を巡らす。

「お、王妃様はレ、レオナをどう思ってるんすか?」

「レオナ?」

フィオーナはきよとんとして忙しく瞬きを繰り返す。いきなり娘のことを持ち出されるとは、思ってもみなかったんだろう。よし、何とか気を紛らわせることができたぞ。

「あの娘には不憫な思いをさせて済まないと思ってるわ。本当は優しい娘なのに」

フィオーナはシヨコラと同じことを言う。俺には、どうもそのレオナに対するその評価が解せない。

「優しいいい娘っすか……俺にはとてもそんな風には思えないんすけど」

「あの娘のわがままは、甘えの裏返しなんです。そこはわかってあげてくださいね」

「裏返しねえ」

俺が死ぬ前にわかってあげられればいいがな。

「あ、そうそう、いいこと教えてあげるわ。あの娘、腐女子なのよ」「はあ?」

今度は俺がきよとんとする番だった。腐女子って聞いたことあるぞ? 確かホモとか同性愛とかが好きなオタク女のことだろ? あ

れ、違うか？　　ってか、何でこの世界にそんな言葉があるんだ？

「BL小説とか漫画とかあの娘の部屋にたくさんあったの見た？」

俺は激しく首を横に振る。あいつの物に触れただけで、俺のケツは三つにも四つにも割れちまうぜ。

「あなたがさっき運んでた本。あれ全部BL物よ」

「ところでBLってなんすか？」

フィオーナは大きくため息をつく。

「そこから説明しなきゃならないのね。BLはボーイズラブの略で、男の子同士の恋愛をテーマにした創作物のことよ」

「ぶっ！　ホ、ホモっすか？」

「そう言っちゃうと身も蓋もないけれど、まあ似たようなもんね」

「わっけわかんねえ」

「あ、でも勘違いしないでね。そういうのが好きってだけで、男の子に興味がないわけじゃないから」

「でもなあ……」

俺にははっきり言って理解できない分野だ。別に他人の趣味にとやかく口を出すつもりはないが、いっしょに楽しむことはできない。

「そうそう、実は今夜はあなたにそのことでお願いがあつて来たのよ」

「お願い？」

フィオーナはニコニコしながら頷く。

どうやらそれが本来の目的で、俺に夜這いをするつもりはなかったようだ。……たぶん。

フィオーナのお願いというのは、確かにレオナに振り回される俺にとっての一つの転機になりそうな話だった。俺はフィオーナのお願いを快諾し、形のいい尻がドアの向こうに消えるのを安堵と未練半々の気持ちで見送ったのだった。

第9話 マーケットと傭兵国家

「その野獣」

「レオナ様、できれば名前で呼んでいただきたいのですが」

「あらそう、ではヒポポタマス」

「レオナ様、それは人間の名前ではありません」

「じゃあ、略してヒポタマ」

「いえ、なぜ略すのかわかりません」

今日のレオナはどうやら機嫌がいい。その理由はわかっていた。

母親である王妃フィオーナから俺にお願いされた件だ。

「で、私わたくしになんのご用でございますか？」

「ヒポタマのくせに人語を解するあなたの意見も聞きたくて。お出かけにはどれを着て行ったらいいかしら」

「そうですね、この薄緑色のロングドレスなどいかがでしょうか」

「これね。ではこれは捨てましょう」

「んな？」

レオナはそのドレスを丸めてポイする。ムカツ！ いかんいかん、せっかく機嫌がいいのにここで俺がキレたらぶち壊しだ。

フィオーナのお願いとは、レオナを隣国のマーケットに連れて行ってほしいということだった。マーケットとは市場のことだが、今回のマーケットとはどうやら世界各国から集められた本の展示即売会だという。俺の元いた世界の言葉でいうところの「コミケ」ってヤツだ。

レオナの好きなBL本やショタコン本は、普通の書店では売ってはいない。もともとこの世界では、書店自体ない。国営の図書館のような施設はあるらしいが、当然“お堅い”本しか置いてない。

先日大量に持ち込まれたBL本は、どうやら隣国のレオナの友人が送ってきてくれたものらしい。

つまりレオナにとって今回のこのマーケットは、自分の欲しい本

を自分で欲しいだけ選べて買えるまさに夢のような機会なのだ。

俺はレオナの引率兼護衛をフィオーナにお願いされた。当然シヨコラとエルザも同行するが、女ばかりでは不安だということで、ラグランジェ王が渋っていたらしい。しかし俺が付いていくというところで、晴れて外出の許可が下りたのだ。

お陰でこの始末だ。

「ヒポ」

「レオナ様、省略し過ぎです。もはや跡形ありません」

「靴はどれがいいでしょう？」

レオナの前には高いヒールの靴からパンプスと言っているような靴まで、十以上並べられている。

マーケットと言ってもいわゆるコミケ。俺はオタクではないから、コミケなんつーものに行ったことはねえ。何となくテレビとかで見知っただけだ。

でも広い場所でたくさんブースがあって、様々な物が売られているというイメージがある。そうなれば歩きやすい靴、動きやすい服装の方がいいだろう。

それに例の噂がある。

「高いヒールの靴は止めた方がいいでしょう。おそらくたくさん歩くでしょうから」

「あら、タマのくせに割とまともなことをほざくのね。不愉快だわ」「レオナ様、それはすでに猫の名前です」

「不愉快」といいつつ、顔は本当に楽しそうだ。身体にまわりつく音符が見えそうだ。何の曲かわからないが楽しげに鼻歌を歌いながら靴を選ぶその横顔は、十六歳という年相応のかわいい女の子そのものだった。とても普段高慢ちきな態度と行動で、周囲にわがままを振りまく王女様には見えない。

その噂を最初に聞きつけたのはエルザだった。

エルザはもともと南の方の国出身ということで、国外にも知り合いは多いらしい。エンジェルティアに来る前の話はあまりしたがら

ないが、顔の広さでは国王にも負けないほどのようだ。

そのエルザの情報網に、不穏な噂が引っかけた。

エンジェルティアはとても平和な国で、ここ何百年も戦争や内紛など起こったことはないらしい。築城の文化がないのはそのためだ。もちろん山賊や強盗団などの犯罪者はいるが、王様のいるこの館の周囲は広大な山や野原だ。その空間自体が防壁となる。過去、このお館に侵入しようとして成功した盗賊はいない。

ドラゴンを始めとした数々のモンスターの餌食になってしまいうからだ。

このお館の周りの土地には、野生の猛獣やモンスターが放たれているらしい。俺が見つかった野原はまだ安全な場所だが、あそこから見えた森の中には凶暴なモンスターや獣がうようよいたようだ。俺は後でそれを聞いた時、かなりビビった。

そういう事情もあってこの国はそこそこ平和な国なのだが、周囲の国はそうではないようだ。

マーケットが開催されるのは隣国「オバマ」。どこの大統領だと思ったが、本気でそういう名前の国らしい。オバマとエンジェルティアは細い海で隔たっており、両国の行き来は船でしかできない。それが幸いしてエンジェルティアは平和なのだが、このオバマという国が非常に物騒な国のようなのだ。

「ねえバカ、上着はどっちがいい？」

「レオナ様、逆になっています。せめて動物の名前にしてください」

「ほほほ、幽霊の正体見たり枯れ尾花」

「なんでそんなこと知ってんすか」

オバマは強力な傭兵によって国を支えている「傭兵国家」だった。そしてレオナがマーケットに行くという噂をどこから聞きつけ、誘拐を画策している一団がいるらしいというのだ。

エルザは先にオバマへ旅立ち、情報収集をしている。俺とシヨコは明日レオナといっしょに出発し、向こうでエルザと合流することになっている。

「ねえタコ」

「今度は魚介類ですか」

俺はその噂がガセネタであることを祈っていた。

第10話 大空へ

「ベクレルう！」

シヨコラが両手を広げて空を見上げる。青いウロコをきらめかせながら、ブルードラゴンがグライダーのように滑空する。これどう見ても特撮かCGでしかあり得ない光景なんだが、すでに慣れつつある自分が怖い。

本日は快晴、気温は暑くもなく寒くもない絶好のお出かけ日和。俺は荷物の詰まったリュックを背負い直し、斜面の下方を見る。ここではレッドドラゴンのプルトニウムがレオナとじゃれている。どうでもいいが、こいつらの名前どうにかなんねえかな。

「マサムネ！」

俺の心臓が跳ね上がる。レオナが嬉しそうに、本当に嬉しそうに優しく俺の名前を呼んだ。レオナの執事になって初めて名前を呼ばれた。それだけ。たったそれだけなのに、俺はドキドキして頬が緩むのを感じた。

「んん、こ、こほん！ な、なんですかレオナ様」

「マサムネ！」

「わん（キリッ）」

ぶっ、犬（眉毛付き）の方かよ！ レオナは足下で腰を振るマサムネ（犬♂）の前足を抱き上げ、鼻面に頬ずりしている。俺はがっくりと肩を落とす。

「わんわん（キリックスッ）」

「ああー！ また笑いやがったあのクソ犬！」

俺は腕まくりをして、マサムネ（犬、いまだに腰を振っている）に向かってずんずんと歩き出す。

「ああー、マサムネさん！」

シヨコラが背後から声を掛けてくる。うっせ！ 俺はもう我慢ならねえ。あのクソ犬に、人間様の恐ろしさをたっぷりと教育してや

らねえと。

どうせ出発したら二、三日は戻って来られねえ。躰はタイミングが大事ってね！

直後、俺の上に巨大な何かがのしかかってきた。

「ぐわあゝ！」

俺は堪らず地面に押し倒される。硬い何かが俺を地面に押さえつける。

「ベクレルう、マサムネさんを下敷きにしてるよお！」

どうやら俺はベクレルの着地点を横切っていたようだ。ベクレルの赤いウロコは、鉄板のように硬いのになにに温かい。

「むぎゅう…… ど、どけ…… むぎゅう！」

俺の顔は押しつけられるウロコで奇妙に歪んでいく。

「ほほほ、ベクレル。そのまま脱糞してしまいなさい」

「にゃ、にゃめよ！（や、やめろ！）」

俺の頭の上で、レオナの高笑いが聞こえる。俺は必死に両手を動かそうとするが、ベクレルの巨体でまったく動かすことができない。ってか、王女が脱糞とか言うな！

「わん！」

するとマサムネ（犬、表情は見えない）が一声吠える。すると俺の上に掛かっていた重さが消える。ベクレルが身体を持ち上げたらしい。俺の言うことは聞かねえくせに、犬のいうことは聞くのかよ！

「くっそ、このクソドラゴン！ ちゃんと安全確認しやがれってんだ！」

「わんわん！（メッ！）」

マサムネ（犬、逞しい眉根にシワを寄せている）が、俺を窘めるように吠える。

「あはは！ 犬にまで叱られてますわ、このド畜生以下の下等生物は」

「ムカツ！」

俺はマサムネ（犬、キリリと眉を持ち上げている。ちよっと凛々

しいとか思ってしまったのは内緒」と睨み合う。

「お待たせしたね」

そこに王様と王妃様が、護衛の兵士たち五人ばかりに囲まれて現れる。

「お父様！ この度はお出かけを許可してくださいまして、本当にありがとうございます！」

レオナは駆けて行って、ラグランジェ王の首に抱きつく。いいなあ、あれ。

「おうおう。レオナ、気をつけて行っておいで。オバマのレンドルフ公爵には、くれぐれもよろしくお願いしてあるからね」

「はい！」

レオナは満面の笑みで頷く。

今日のレオナは、今までと一風変わった出で立ちをしている。レモン色のブラウスにエンジ色のボレロ。膝上五センチくらいの白いミニスカートの、雪のように真っ白いロングブーツ。横には同じく白いボンボンが二個ずつ揺れている。ストレートロングの金髪は縛らずに流しているが、真っ赤なカチューシャをしてばらけないようにしている。あれはどう見てもキューティハ…… ごほんごほん。

とにかく活動的なのは言うまでもない。俺は目の前でちらつくレオナの白い太ももをチラ見しながら、王妃様の方へ近づく。

「王妃様。例の件、エルザから何か連絡がありましたか？」

レオナに聞こえないように、小声で聞く。フィオーナ王妃は形のいい眉根をほんの少しだけ寄せて、小さく首を横に振る。

「とりあえず、大規模な盗賊や強盗団の動きはマークさせています。でも個人や少人数で動く傭兵の動きは皆目検討もつきません。後はあなたとエルザに頼るしかありません」

「ま、ガセだと思えますけどね」

王妃は俺の言葉に苦笑して、視線を逸らす。レオナが近寄ってきたのだ。

「こら外道、お母様に近づくんじゃないわよ！」

「レオナ、そんな言葉遣いはおよしなさい。今回お出かけできるようになったのは、マサムネさんのお陰なんですから」

「わん！（得意げにキリッ）」

「お前じゃねえ！」

「は、はい。でも……」

レオナは俺を不審な目で見る。どうでもいいが、美少女ってのはどんな表情しても綺麗なんだよな。きっと、鼻くそほじっても綺麗に違いない。

「なあに？ 何か不安でもあるの？」

「この野獣のような野蛮な男に、わたくし変なことされたりしないか心配なのです」

「んなっ！」

「おゝほっほっほ！ 心配しないでいいわよ。その辺はエルザとシヨコラが、しっかりと見張っていますから」

「はいですう！ お任せくださいですう！ マサムネさんがレオナ様に何かしようとしたら、うちがちょんぎっちゃうですう！」

「な、なにを？ 何をちょんぎっちゃうの？」

俺は下腹部に危険を感じた。

「では道中気流が激しいところもあるだろうから、振り落とされないようにな。ま、マサムネ殿以外は心配いらないだろうが」

オバマまではドラゴンで二時間ってところらしい。一般人にはあり得ないが、エンジェルティアの王族だけはドラゴンを乗用できる。今回は行き帰りの安全面と時間短縮を考えて、ドラゴンで移動するようになったのだ。

俺はシヨコラといっしょにベクレルに跨る。レオナはいかにも慣れた風で、プルトニウムに乗って手綱を掻い繰る。

「マサムネさん、しっかりと掴まっていますう」

「お、おう」

馬さえ乗ったことのない俺にとっては、いかに巨大なドラゴンでもかなりビビる。それでもシヨコラの小さな腰に腕を回すと、少し

は安定できた気がした。

「じゃ、しゅっぱあゝっ！」

レオナが楽しそうに叫ぶと、プルトニウムは陽光きらめく青空へと勢いよく羽ばたいていく。その様子を、目を細めて眺めていると体が一瞬沈む。次の瞬間内臓が全部下方へ引っ張られ、俺の耳にはごうごうとした風の音しか聞こえなくなる。

「うわあああっ！」

俺とシヨコラを乗せたベクレルは、大空の真っ只中へぐんぐんと上昇していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2623y/>

エンジェルティアの最強執事

2011年11月27日22時26分発行